

境外社の造替と建築形式

—出雲大社境外社の調査より—

はじめに 当研究所では、2006年度より出雲大社境外の摂末社についての建造物調査をおこなっている。前年度は合計12件の境外社のうち、2件について調査をおこない、その結果を報告した¹⁾。その後、残る10件についての調査をおこない、出雲大社境外社の建築的特徴と、造替遷宮のあり方について検討した。

境外社の概要 出雲大社境外社は、出雲大社の周辺に点在し、出雲大社本殿の祭神である大国主神にゆかりのある神々がまつられている。これらの神社がいつ頃から存在していたかは定かではないが、風土記や延喜式内社にその存在を認められるものもあり、多くは出雲大社の創立期までさかのぼるものと考えられる。現在、阿式社と伊那西波岐神社の2社は個別に宮司を置くが、それ以外は出雲大社の神職が奉仕している。

境外社の平面形式 境外社の一覧と建築調査の結果判明した建築形式と建築年代を表6に示す。

境外社の建築は、上宮の弊拝殿付の平入本殿や、湊社や下宮の流造が例外的であるが、その他の社殿は切妻造妻入の大社造に分類される。このうち、乙見社と出雲井社、三歳社と因佐社がほぼ同形式である以外はいずれも平面規模や向拝の有無などが異なり、変化に富んだものといえる。

また建築規模に注目すると、大社造の社殿のうち、2間四方の平面を探る社殿は3棟で、1間四方の社殿は8棟である。境内社の場合は、本殿以外の10棟で2間四方のものが6棟、1間四方のものが3棟であり、境外社は境内社よりも規模の小さい社殿の割合が多い。

ところで、大社造の平面形式の分類と変遷については川上貢による分類が知られる(図17)²⁾。大社造の境外社をこの分類に当てはめると、阿式社と伊那西波岐神社はA形式(阿式社は、心御柱に残る痕跡から当初は心御柱をもたないB2形式であった可能性もある)、命主社はC2形式、三歳社と因佐社はE2形式、祓社はE3形式となるが、C2形式の唯一の遺構とする命主社は、当初はD1形式であったことが本調査で判明しており、この分類を再検討する必要があるだろう。

このほか、乙見社・出雲井社・大歳社の3社は川上貢

の分類には当てはまらない。このうち、乙見社と出雲井社は、E1形式が2間四方から1間四方へ縮小したものと考えられる(便宜的にE4形式とする)。E2形式はE4形式から前面の向拝柱が省略されたものといえ、大歳社はE4形式から前方の階が見世棚に変化したもの(E5形式とする)と考えられる(図18)。すなわち、E1→E4→E2・E5という変遷が考えられる³⁾。

境外社への造替 今回の調査で、新たに三歳社の野地板で墨書を確認した(図19)。墨書は「東門神」「大工政左衛門」とあり、境内摂社門神社の古材が使用されていることが判明した。この結果、前回報告した乙見社、命主社と合わせて3棟で境内社名を記した墨書が確認されたこととなり、寛文に造営された境内社の部材を何らかの形で利用していることが判明した。とくに乙見社、三歳社両社より「東門神」の墨書が発見されたことは、東門神社の部材が複数の境外社へ伝えられたことを意味し、延享造替のあり方を考える上で重要な資料となる。

また、出雲井社は今回の調査では建築年代を特定する資料は認められなかったが、乙見社と同形式であることから、乙見社と同様に部材に墨書を残している可能性があり、今後詳細な調査がおこなわれることを期待する。

まとめ 以上出雲大社境外社の建築調査の結果より、大社造の変遷と延享の造替のあり方について述べた。寛文に造営された建物の古材を現在も伝える社殿が境外社として現存していることは、今回の調査における大きな成果である。境外社以外の周辺の神社にも大社造替時に古材が伝わった可能性を考慮すると、出雲大社境内のみならず、境外社を含めた周辺の建築の価値付けを再考する必要があるだろう。なお、本調査は2008年度に報告書を刊行する予定である。

(大林 潤)

註

- 1) 大林潤「出雲大社境外社の調査」『紀要2007』。
- 2) 川上貢「島根県の近世社寺建築」『島根県近世社寺建築緊急調査報告書』島根県教育委員会、1980。
- 3) 川上貢の分類では、前方に向拝柱を備え、縁と高欄を四周に回す境内末社釜社・氏社をE3形式とする。この形式は、E2形式に高欄を付加した平面形式であるが、境内社であることを考慮すると、E2形式の発展形ではなく、E1形式と高欄を回すA形式からの流れ(D3形式か)が融合した形とみられる。

表6 出雲大社境外社の建築様式と建築年代

	形式	寸法	備考	建築年代	分類
命主社	正面二間 側面二間 切妻造 妻入 向拝付 こけら葺	正面6尺+6尺 側面6尺+6尺	「御向」墨書あり。「御向社」の材料を使用。当初は御向社と同形式で、その後心御柱を付加。	延享造替時	D 1
阿式社	正面二間 側面二間 切妻造 妻入 向拝付 銅板葺	正面7尺+7尺 側面7尺+7尺	明治15年由緒書があったという（近社寺報告）。床高を2回変更。心御柱は床高で根継あり。	延享造替後の新築→明治大修理、もしくは明治新築	A
乙見社	正面一間 側面一間 切妻造 妻入 2本の向拝柱で大屋根受け こけら葺	正面7尺半 側面6尺半	「東門神」「脇宮」墨書あり。東門神社、脇宮の部材の一部を使用。	延享造替時か、それ以後に現在の形式で建直し	E 4
三歳社	正面一間 側面一間 切妻造 妻入 大屋根を受ける向拝柱なし こけら葺	正面8尺半 側面7尺半	かなり転用材を使用。「東門社」墨書あり。東門神社の部材の一部を使用。	延享造替時	E 2
上宮	本社 柏行三間 梁間二間 切妻造 平入 こけら葺	正面16尺(2間半) 側面9尺(1間半)	三間社で扉は中央一間。背面柱に埋木。18c前頃の絵様。	延享新築もしくは延享に修理	—
	拝殿 柏行三間 梁間三間 切妻造 妻入 こけら葺	正面16尺(2間半) 側面20尺弱(3間)	本社と同時期か。	延享新築もしくは延享に修理	—
	幣殿 隨神門 三間一戸 隨神門 切妻造 平入 こけら葺	正面3尺+6尺半 +3尺 側面6尺	本社と同時期か。 本殿・拝殿より時期は降るか。	延享新築もしくは延享に修理 延享造替時もしくはその後建替	—
出雲井社	正面一間 側面一間 切妻造 妻入 2本の向拝柱で大屋根受け こけら葺	正面7尺半 側面6尺半	年代を確定する資料なし。乙見社と同形式。	延享造替時	E 4
伊那西波岐神社	正面二間 側面二間 切妻造 妻入 向拝付 銅板葺	正面6尺+6尺 側面6尺+6尺	当初より心御柱をもつ大社造。寛延2年(1749)の棟札があったという（近社寺報告）。昭和8年に部材取替。	寛延2年か	A
因佐神社	正面一間 側面一間 切妻造 妻入 向拝柱なし 檜皮葺	正面9尺 側面7尺半	昭和16年に台風により倒壊。同18年遷宮(大社資料)。昭和19年に、旧社殿の通りに建て替え(聞き取り)。	昭和19年	E 2
湊神社	一間社 流造 こけら葺き	正面6尺半 側面5尺半	浜床、床板掛けの留釘は洋釘使用。昭和初期か。昭和32年に屋根替え。	昭和初期	—
下宮	一間社 流造 檜皮葺	正面3尺 側面2尺半	明治頃か。長押の金具は和釘使用。付替え痕あり、洋釘も使用。昭和40年修造遷宮は屋根替えか。	明治	—
大歳社	正面一間 側面一間 切妻造 妻入 2本の向拝柱で大屋根受け 階なし こけら葺	正面2尺半 側面2尺半	数年前に旧社殿のとおりに建直し。背後に旧社殿の基礎残る。規模は現程度。	平成	E 5
祓社	正面一間 側面一間 切妻造 妻入 2本の向拝柱で大屋根受け 銅板葺	正面2尺半 側面2尺半	材料等新しい。	昭和(戦後か)	E 3

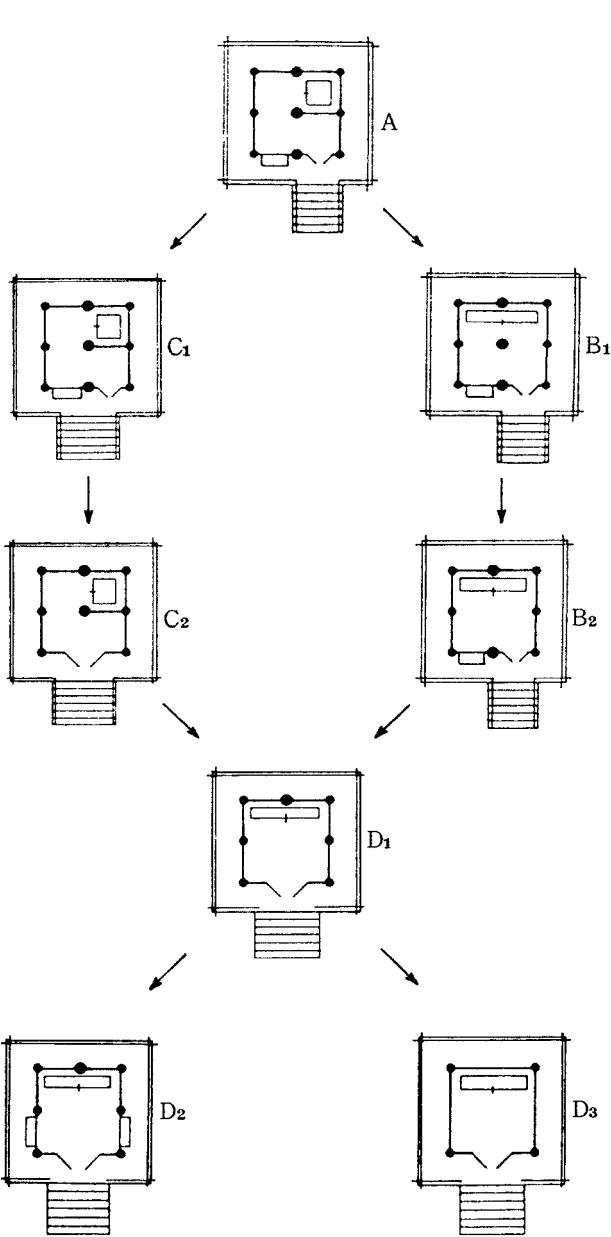


図17 従来の大社造変遷模式図（川上 1980より転載）

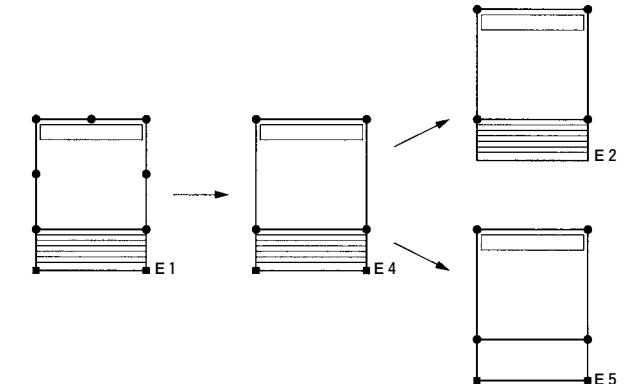


図18 E形式の変遷模式図



図19 三歳社外観および墨書